

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350072

研究課題名(和文) 地域社会の「つながり」を育む住まい・まちづくり学習の実践モデル構築に関する研究

研究課題名(英文) A study on practical models of creating community and better living environment for building up social capital

研究代表者

延原 理恵 (NOBUHARA, Rie)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40310718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：住まい・まちづくり学習(活動)の優れた事例を対象に、地域資源(モノ・コト・ヒト)の存在とその関係性、住民と地域資源とのかかわりについて調査し、住まい・まちづくり学習(活動)を通して地域資源が住まい・まちづくりの主体形成にどのように働きかけるのか、住まい・まちづくり学習(活動)の展開にともなう地域資源の関係性や働きの変化を可視化した。その結果、歴史資源の豊富な地域では、歴史資源を活かす取組みが、住民の主体的なまちづくり活動につながる様子を捉えることができた。これらの結果をふまえ、地域社会の「つながり」形成に寄与する住まい・まちづくり学習の実践モデルを構築し、その実践結果を冊子にまとめた。

研究成果の概要(英文)：We investigated the existence of regional resources and their relationships, especially the relationship between residents and regional resources, for excellent cases of town development activities. This study showed how regional resources positively affect community empowerment in town development activities, through visualizing the changes in the relationships between the regional resources accompanying town development activities. In several areas with abundant historical resources, we were able to grasp how initiatives that make use of historical resources lead to residents' empowerment in community design. Every community has a history, and events planned around it are educational. These activities strengthen community ties. Based on these results, we have developed some practical models of creating community and better living environment that contribute to building up the social capital in the community, and compiled the results of some practices in a booklet.

研究分野：複合領域(住居学)

キーワード：住まい・まちづくり学習 住教育 まちづくり 地域資源 地域力

1. 研究開始当初の背景

現代社会においては「つながり」の希薄化が社会問題として指摘され、地域コミュニティの弱体化などの一因になっている。こうした地域社会の「つながり」はソーシャル・キャピタルとして、地域政策の成果を左右するものとしても注目されている。一方、地域力向上のためのまちづくり学習は各地で行われており、住民参画意識や市民性育成の観点からの研究報告は多い。しかしながら、ソーシャル・キャピタルという観点から住まい・まちづくり教育にまで踏み込んだ研究はみられない。

研究代表者らは平成22～24年度の科学研究費基盤研究(C)において、持続可能な社会形成のために地域の住生活にとって継承、再生あるいは再構築していくべき営みを形づくる学習機会の創出とそのためのプログラムづくりを行った。その成果として、住まい・まちづくり学習は地域資源の「モノ」「コト」「ヒト」を結びつけ、地域環境の創造的主体者形成を促すことがわかった。さらに、研究過程においては、地域社会における「つながり」の有無が住まい・まちづくり学習(活動)の継続性や発展性を左右することが示唆された。住まい・まちづくり学習(活動)自体が地域社会の「つながり」を育むものであれば、地域住民の住まい・まちづくりへの参加がさらに促され、ポジティブ・フィードバックな関係を築くことができる。そこで、地域社会の「つながり」を育むような住まい・まちづくり学習について、地域資源の働きとその関係に着目しながら、実践モデルを提示できると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、以下の2点を目的とした。

(1) 地域資源(モノ・コト・ヒト)の関係性を可視化し、住まい・まちづくり学習を通して地域資源が住まい・まちづくりのつながり形成にどのように働きかけるのかを明らかにする。

(2) 住民の地域資源とのかかわりを把握し、地域生活において「つながり」の核となる地域資源を考察する。そのうえで地域社会の「つながり」に着目した住まい・まちづくり学習の実践モデルを提示する。

3. 研究の方法

上記の研究目的に対し、事例調査とその分析及び学習モデルの構築と実践を行った。

(1) 住まい・まちづくり学習の事例を調査し、地域資源の抽出と整理を行った。対象とした事例は、伝統的建造物群保存地区にある国の重要文化財指定の住宅を通じた住まい・まちづくり学習、地域の伝統行事の継承活動、ミュージアムを活用した住文化継承学習、子どもと築く復興まちづくり協働プロジェクト、空き家再生プロジェクト、学校教育におけるふるさと学習、村上市、尾道市、豊

後高田市におけるまちづくり(まちおこし)活動、こどものための建築ワークショップ等である。

(2) 調査事例の中から、地域資源を介した地域の生活像やまちの課題とそれに対する取り組みについて時系列的に把握することができ、地域資源を活用したまちづくりにより地域を活性化させた事例を選び、町おこし物語を計量分析することにより、住まい・まちづくり活動と地域資源の関係性と働きを可視化した。

(3) 以上をふまえ、住まい・まちづくり学習の構築と実践を行った。調査事例や実践事例の中から、地域資源(モノ・コト・ヒト)との関係性を考察し、地域社会の「つながり」形成に寄与する住まい・まちづくり学習の実践モデルを選抜し、冊子にまとめた。

4. 研究成果

(1) 住まい・まちづくり学習の事例調査

住民が地域資源を活用して参加している住まい・まちづくり学習(活動)について、現地聞き取り調査を行った。

新潟県村上市

古びた町屋を壊して近代的なまちにするという計画が発表されたとき、あるひとりの住民がむらかみは希少な城下町で町屋は歴史的な建物であり、近代化することによって、その価値が失われてしまうということを知り、まちの魅力を活かした町おこし活動をはじめられたという。町屋公開の取組みから、町屋を巡る楽しみを付加した「人形さま巡り」「屏風まつり」、城下町の景観を復活させる「黒堀プロジェクト」「町屋外観再生」など住民自身が次々とさまざまなまちづくりプロジェクトを展開し、小中学生へのまちづくり学習も積極的に行われている。

フィンランド・ヘルシンキ

建築を通して「住まい」や「まち」に関心を持ち、社会とのかかわり、未来のよりよい環境づくりに参加する機会や知恵、手段について学んでいる子どものための建築学校「Arkki」を訪問調査した。建築教育は子どもたちの文化的アイデンティティの発達を支え、帰属意識を育み、身近な環境にかかわり参加したいという気持ちを生み出し、グローバル意識や持続可能な発展に向かう道筋を示している。ヘルシンキ市の再開発を考えるという長期プログラムでは、実際の再開発にかかわることになり、地域社会とのつながりや社会とのかかわりを学ぶ機会となっていた。

学校教育における住まい・まちづくり学習

愛媛県内子町には町内に伝統的建造物群保存地区があり、町並み保存に関するまちづくり活動や学習が行われてきている。また、エコロジータウン内子として、学校と地域が連携したESD学習活動も盛んである。村上市と同様、地域住民が恵まれた歴史資源や自然資源の文化的価値を十分認識していなかつ

た時代があり、保存地区の選定を契機として、今ではこれらを次世代に引き継ぐためのまちづくり学習が重視されている。

京都府伊根町には舟屋の並ぶ漁村が重伝建地区として選定されており、この町並みはまちの歴史や文化を反映している。景観を保持するためには地域住民の理解が欠かせない。単に観光物件となるのではなく、地域の生活と両立するまちづくりを目指している。地元の小中学校では重伝建地区のまちづくり学習を授業に取り入れている。中学生が観光客を案内する「わがまち歩き」は、生徒のまちに対する誇りや愛着を育て、自信をつける機会となっている。

まちの課題に対するまちづくり活動

全国的に空き家問題が深刻化しているが、広島県尾道市では「尾道空き家再生プロジェクト」によって空き家再生と移住者の支援とコミュニティづくりが行われている。そこでは、さまざまな空き家再生のためのイベントやワークショップが開催されている。例えば、空き家に残された多くの家財道具も空き家再生を阻むひとつであるが、現地で蚤の市を開き、空き家の片づけと空き家への関心をもってもらう機会をつくりだしている。今後は次世代（小中学生）に向けての取組みも考えたいとされていた。

全国的にも空き店舗が増加し、かつての賑わいが消え衰退が著しい商店街は多い。しかし、大分県豊後高田市では、古びた商店街の姿を逆に地域資源と捉え、商店街を活性化することに成功している。古くて不便と思っていたことにレトロな価値があると気づき、昭和の街並みを活かしたまちづくりが行われている。まちのコンセプトがまちの物語性を強くし、映画のロケ地としても利用されるようになり、多くの人を訪れるようになったという。昭和のモノに地域住民（ヒト）によるまちの案内（コト）が組み合わせさり、まちの魅力を高め、地域社会のつながりを生み出している。

(2) まちづくりと地域資源の関係性と働き

地域資源を見出すまでの過程やそれを活かしたまちづくりの学習や活動の事例調査を行い、まちの物語性について考察した。以前には価値を見出していなかったものが、地域資源として見直され活用していく過程を分析すると、段階に応じてそれにかかわるヒトやコトが有機的に結びついていく様子を捉えることができた。

歴史ある村上市のまちづくり物語を分析すると、抽出語のネットワークの頻出語には歴史を感じさせる語が多くみられ、村上市の場合はまちづくりを促進させる地域資源に歴史的なモノが多いことがわかった。「城下町」で「町屋」があるという地域資源の存在の覚知が町の近代化を再考する契機となっている。

図1はあるひとりの「旅人」との出会いから

町屋内部を公開しはじめるというまちづくり活動の初期に出てくる語の共起関係を図示したものである。町屋である「店」の「内部空間」の魅力再認識し、城下町の「マップ」をつくって広報し、さらに、町屋の「人形」を展示する企画を思いつき、その実行に走り出すという展開のなかで核となる地域資源が明らかとなった。

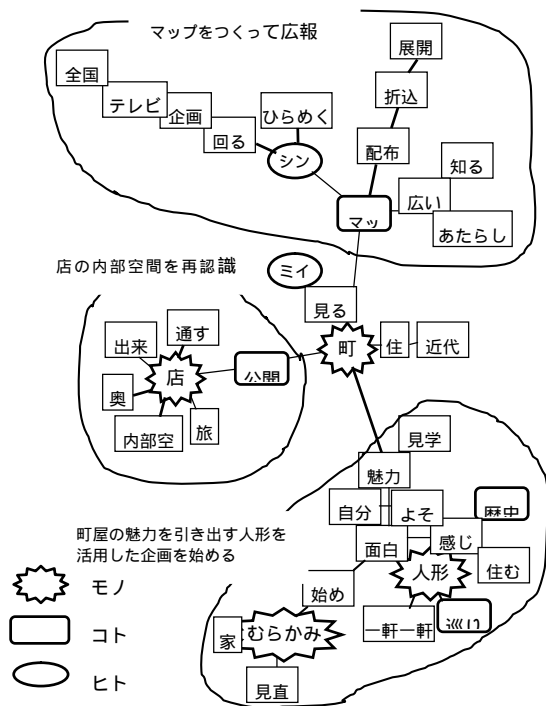


図1 村上の町おこし（初期）

(3) 住まい・まちづくり学習の実践モデル

地域社会の「つながり」を育む住まい・まちづくり学習におけるモノ・コト・ヒトの関係性を考察し、地域の課題に向き合い、地域生活を豊かにし、未来への希望を見出す学習モデルを検討し、学習（活動）モデルの構築と実践を行った。これらの成果を、地域社会の「つながり」を育む住まい・まちづくり学習実践モデル集としてまとめ、教育関係者や住まい・まちづくり関係者、関連研究者等に配布した。主な内容を以下に紹介する。

地域資源の認識からはじまる住まい・まちづくり学習

京都府笠置町では人口減少問題に直面し、危機感をもってまちの活性化に取り組もうとされている。地元の資源を認識する取り組みとして、河川敷の岩場が絶好のボルダリングエリアであることから、ここを舞台にした映画製作を行い、全国で上映する活動が行われた。映画製作には多くの地域住民が参加し、映画製作を通して、地域資源の再認識と町に誇りをもつ契機となり、その後はボルダリングのジュニアクラブが結成されるなど、モノ・ヒト・コトの新たな関係がうまれている。

また、同町では空き家活用に向けての取組みも模索されている。リノベーション以外に

空き家に残されている家財道具を片付けながら、アンティーク品を探すワークショップを開催した。地域のお年寄りとお話しながらの片づけは、若者にとって昔の地域生活像を知る機会となることがわかった。

移住者のつながりを育むまちの再生

瀬戸内の小さな港町三津浜には近年、空き家を改修して開業する若者が県内外から集まりつつある。こうした現象は歴史ある町のみならず都市部の路地裏や縁辺部でも見られ、職住一体・職住近接のライフスタイルは地域との関係性を問い直すものとなっている。移住者は、住民と空き家の再生(リノベ・DIY)でつながり、まちづくり活動でつながり、生業は口コミやネット活用で巧みに地域内外へとつながり、つながりの輪を広げている。まちなかの新しい生業とライフスタイルから暮らしとまちの再生の新しい可能性を示している。

伝統文化を次世代に継承する住まい・まちづくり学習

重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建地区)では、町並み・集落やそこでの暮らしの伝統文化を伝承する様々な活動が行われている。岐阜県白川村の小学校(義務教育学校)では白川村の伝統文化や結の心を地域から学びふるさとを知る学習を推進している。屋根組み体験とともに合掌造りのペーパークラフトを使った学習による合掌造りの構造や歴史を学ぶ授業実践を行った。

大阪府八尾市八尾木地区では野菜をつかった造形物を展示する地域の伝統行事「つくりもんまつり」が継承されている。しかし、近年、保存会メンバーが高齢化し、地域の次の担い手の育成が課題となっている。アンケート調査によって20~40歳代では伝統的なつくりもんまつりへの協力賛同が得られにくい現状がわかった。一方で、小学生が参加しやすいまつりであることもわかり、地域のコミュニティセンターと連携して「つくりもんまつり」に関するワークショップを開催し、小学生の参加する機会を創設した。今後の継承や協力支援の方向性の検討が急がれる。



図2 子どもたちの「つくりもん」

学校と地域の協働による住まい・まちづくり学習

学校におけるふるさと学習は、地域の人々との交流をうみだし、学校と地域のつながりを育てている。重伝建地区の肥前浜宿では、

学校と地域だけでなく、行政、大学、NPOのバックアップも手厚く、「肥前浜宿スケッチ大会」、「町並みガイド名人になろう」、「秋の蔵々まつり町並みガイド」、「伝統家屋のペーパークラフトを使った授業」等さまざまなふるさと学習を展開している。町並み保存の担い手育成は全国的な課題となっているが、多様な主体の連携による地域の創意工夫を生かした町並み学習は次世代へつなぐ働きをしている。



図3 授業で作ったペーパークラフト

子ども参画の住まい・まちづくり学習

子ども達自身が実際の「家づくり」「まちづくり」にかかわるとき、さまざまな力をつけていく。自分たちが中に入れるサイズの家をつくる「家づくりワークショップ」を実施した。自分たちの家という最終目標が明確なだけに、自分たちの働きが形となって現れるため、創意工夫する力が試され、協働する力や主体的に行動する力が引き出される。つくる過程で自ずと地域の材料や伝統技術等を学ぶことになり、人(仲間、専門家)とかかわる力が養われる。家づくりを通して、人とかかわり、社会とかかわることの面白さを体験する機会を提供できた。



図4 こどもの家づくりワークショップ

東日本大震災の被災地域の復興まちづくりに子どもが参画することは、子どもたちにとって地域の良さを再発見するとともに参画の意味を知る絶好の機会になる。街区公園の基本構想から完成した公園での花壇づくりまで継続的に社会とかかわる経験は、地域(人や場)とのつながりを育むことになると考えられる。子どもたちが主体的に考え、地域とのつながりを具体的な形として提案することは、大人たちも未来の姿を改めて考える契機となった。今後は、震災を経験して

いない世代の子ども達も地域の歩みを知り、地域の想いに触れるきっかけとしてのまちづくり学習プログラムに深化していくことが期待される。



図5 街区公園基本構想への子ども参画

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計11件)

碓田 智子、長谷川 ユリ、服部 麻衣、奥田 千尋、谷 直樹、岩間 香、今昔館の町並み展示で外国人に「和の住文化」を伝える手法の検討 - 外国人来館者向けプログラムの実践、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報、査読無、16、2017

田中 勝、民家ペーパークラフトを活用した地域の住まい学習 その1 住教育教材としての民家ペーパークラフト、住宅(日本住宅協会) 査読無、66(11) 2017、54-60
曲田清維、暮らしとまちの再生、日本家政学会誌、査読有、68(10) 2017、554-558

延原 理恵、碓田 智子、田中 勝、佐藤 慎也、まちづくり物語のテキスト分析を通じた地域社会のつながり形成に関する研究 - 村上市の町おこしの物語における地域資源の働きを可視化して -、日本建築学会住宅系研究報告会論文集、査読有、11、2016、75-82

碓田 智子、谷 直樹、奥田 千尋、服部 麻衣、戸柱 美智代、外国人来館者と子どもとの交流プログラムの試み - 大阪くらしの今昔館の町並み展示を活用して -、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報、査読無、14、2016、19-22

碓田 智子、服部 麻衣、谷 直樹、居住文化を次世代へつなぐ「大阪くらしの今昔館」の取り組み - 常設展示室の町並み展示を活用して -、2016年度日本建築学会大会建築計画部門研究協議会資料 居住文化とミュージアム - ネットワークでつなぐ新しい博物館のかたち 建築計画編 -、査読無、AIJ-1608-00900、2016、98-101

奥田 千尋、碓田 智子、大阪くらしの今昔館 夏休み まちなみ探偵団 - 君はミッションを果たせるか? -、あんじゅ(大阪市立住まい情報センター) 査読無、64、2015、7-8

佐藤 慎也、子どもと築く復興まちづくり協働プロジェクトについて、こども環境学研究、査読無、11(1) 2015、18-19

延原 理恵、的崎 あかり、寺本 愛、持続可能な地域社会のための住まい・まちづくり学習 - 生活を創る木とその循環に着目して -、京都教育大学教育支援センター教育

実践研究紀要、査読無、15、2015、145-152
延原 理恵、三上 卓、上園 智美、男女共同参画の視点に着目した避難所設備・運営に関する意識調査 - 瑞浪市における避難所開設・運営図上訓練を通して、地域安全学会東日本大震災特別論文集、査読有、3、2014、39-40

碓田 智子、学校教育での住まいの教育、日本建築学会 建築雑誌、査読無、129(1657) 2014、10-11

〔学会発表〕(計14件)

山石 佳奈、延原 理恵、暮らしの室礼に関するアンケート調査、日本家政学会関西支部第39回研究発表会、2017

延原 理恵、三上 卓、笹田 修司、上園 智美、家庭における災害時用備蓄に関する調査、日本家政学会第68回大会、2016

延原 理恵、三上 卓、上園 智美、地域の避難所設備・運営に関する男女共同参画意識について、日本家政学会関西支部第38回研究発表会、2016

Nobuhara, R., Mikami, T., Sasada, S., Uezono, T., Residents' preparedness in anticipation of the Nankai Trough Megathrust Earthquake: Regional disaster plan for stockpiles, 16th World Conference on Earthquake Engineering, 2017

佐藤 慎也、新門脇地区街区公園づくりプロジェクト、日本建築学会2016年度子ども教育支援建築会議全体会議、2016

的崎 あかり、延原 理恵、榊原 典子、クロスカリキュラムによる建築教育の検討 - UIAの建築教育と小学校学習内容を対応させて -、こども環境学会2015年大会、2015

笹田 修司、三上 卓、上園 智美、延原 理恵、地域住民の災害用食糧備蓄に関する現状調査 - 備蓄開始の動機と備蓄をしない理由 -、平成27年度土木学会四国支部第21回技術研究発表会、2015

延原 理恵、三上 卓、上園 智美、地域の避難所設備・運営に関する男女の意識の違いについて、日本家政学会関西支部第37回研究発表会、2015

三上 卓、延原 理恵、畠 一樹、笹田 修司、自宅通学生および独り暮らし生の災害用食糧備蓄の現況調査、土木学会四国支部第10回南海地震四国地域学術シンポジウム、2016

佐藤 慎也、科学技術と地域 - 子ども環境を考える Building back better の試み、科学技術社会論学会第14回年次研究大会、2015

佐藤 慎也、大槌さとやままるごとプレーパークの試み、2015年度日本建築学会大会(東海)学術講演会、2015、133-134

仲島 聖子、延原 理恵、榊原 典子、茶道体験を通じて日本人の心を学ぶ授業の試み - 家庭科住生活分野において室礼から考え

る -、日本家政学会第 66 回大会、2014
村田 遼平、榊原 典子、延原 理恵、これからの家庭科教育における文化的感性に関する考察、日本家政学会第 66 回大会、2014
崎 あかり、延原 理恵、榊原 典子、小学生を対象とした建築教育 - 発達段階からの考察 -、日本家政学会関西支部第 36 回研究発表会、2014

〔図書〕(計 1 件)

碓田 智子、柏書房、『受け継がれる住まい』第 2 章 4 日本の住文化の教育のいまと課題、2016、60-68

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

延原 理恵、碓田 智子、田中 勝、佐藤 慎也、曲田 清維、地域社会の「つながり」を育む住まい・まちづくり学習の実践モデル、2018、全 24 頁

延原 理恵、高谷 基彦、東野 美稚子、趙賢株、平成 29 年度京都市安心すまいづくり推進事業 (住教育の推進) 報告書 - 学校教育における住教育支援のための教育教材の開発 -、2018、全 250 頁

佐藤 慎也他、復興の「今」を見に来て！中学生の希望をかなえた公園が誕生 (宮城県石巻市) ユーアールプレス、51、21-22、2017

田中 勝、「紙で伝統建造物を再現 山梨大・田中教授が模型」、佐賀新聞、2017.5.17
田中 勝、「鹿島・浜小児童 茅葺き家屋を模型で作成 町並み保存、折り紙で学習」、佐賀新聞、2017.6.18

延原 理恵、高谷 基彦、東野 美稚子、趙賢株、平成 28 年度京都市安心すまいづくり推進事業 (住教育の推進) 報告書 - 学校教育における住教育支援のための教育教材の開発 -、2017、全 96 頁

佐藤 慎也他、こどもたちが築くみんなの公園ワークショップ、JIA 日本建築家協会 ゴールデンキューブ賞 2016/2017 (学校部門) 2017

佐藤 慎也他、第 5 回子どものまち・いしのみまき、日本ユニセフ協会 東日本大震災復興支援 第 278 報、2016

佐藤 慎也他、「未来の教室」ワークショップの大槌学園新校舎完成、日本ユニセフ協会 東日本大震災復興支援 第 282 報、2016

田中 勝、「鹿島市の山口醤油醸造場、折り紙模型に」、佐賀新聞、2016

田中 勝、「伝統建築ペーパークラフトに山梨大・田中教授がキット開発」、山梨日日新聞、2016.4.16

田中 勝、「民家模型作り 特徴語り合う甲府城西高」、山梨日日新聞、2016.5.7

田中 勝、「鹿島の酒蔵通り 伝統の醸造場 紙模型で再現 浜小の 4 年生挑む」、朝日新聞佐賀版、2016.7.11

延原 理恵、高谷 基彦、生川 慶一郎、若林 萌、平成 27 年度京都市安心すまいづくり推進事業 (住教育の推進) 報告書 - 京に住まう心を育てる住教育支援のためのプログラム開発に関する研究 -、2016、全 69 頁
佐藤 慎也、竹中工務店、日本ユニセフ協会「子どもにやさしい復興計画」支援事業報告書 特別授業 復興プロジェクト「新門脇街区公園づくり」ワークショップ、2015、全 127 頁

佐藤 慎也他、石巻・門脇地区の復興事業に地元の子どもたちが参加、日本ユニセフ協会 東日本大震災復興支援 第 259 報、2015

佐藤 慎也他、「模型で理想のまちづくり被災小学生ら特別授業、未来の荒井地区に挑戦」、産経新聞、2015.12.18

佐藤 慎也他、「夢いっぱい 被災地の 10 年後」、河北新報、2016.2.8

延原 理恵、フィンランド、エストニアを訪問し住まい・まちづくり学習を考える、京都教育大学広報誌、137、2016、7-8

6. 研究組織

(1) 研究代表者

延原 理恵 (NOBUHARA, Rie)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40310718

(2) 研究分担者

碓田 智子 (USUDA, Tomoko)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70273000

田中 勝 (TANAKA, Masaru)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：70202174

佐藤 慎也 (SATO, Shinya)

山形大学・工学部・教授

研究者番号：20260424

曲田 清維 (MAGATA, Kiyotada)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：00116972

(平成 28 年度より連携研究者)